垂水史談会報

第 45 号
2022（令和４）年
7月発行

【報　告】

令和４年度　総会を開催　―垂水市市民館―

４月２４日（土）午後１時半から垂水市市民館で、令和４年度総会を開催しました。

町田猛会長のあいさつや坂元教育長の来賓あいさつの後、令和３年度経過報告・決算報告、ならびに令和４年度年間計画・予算案が承認されました。そして役員は昨年度に引き続き、留任となりました。

総会終了後、現地研修に移り、折しも来垂中の東川隆太郎氏（鹿児島探検の会）と共に、会員の山田義之氏（新城郷土史研究会会員）の案内で、新城島津家ゆかりの「見晴邸及び遠見番所跡」、戦時中、特攻艇・震洋の基地のあった「白崩え（したくえ）」、江戸時代、砂鉄を採取していたまさかりの海岸などを見学して、当日の日程を終了しました。

「山下清・北迫正治」展

４月２日（土）より５月８日（日）まで、垂水市立図書館開館３０周年と合わせて、垂水史談会と教育委員会の共催による「山下清と北迫正治の世界」の特別企画展を開催しました。

放浪の画家と呼ばれる山下清は昭和３１（１９５６）年１月、本町の川畑弘見氏が桜島港の袴腰で出会い、共に垂水の川畑氏宅にやってしばらく滞在。その後、垂水市内の数か所の家に逗留しながら、垂水の人物画や風景作品を残しています。山下清は３月１０日、垂水で３４歳の誕生日を迎えています。図書館の会場では以前、川畑弘見氏が垂水に寄贈された４点の山下清の作品を含む５点とスケッチ帖、逗留していた頃の写生中の姿や垂水の人々との写真を展示しました。

また、元垂水生まれの北迫正治氏は、大学のラグビー試合中、首の骨を損傷し肩から下が動かなくなりましたが、絵筆を口にくわえて描いた作品とともに、郷愁を誘う詩も残しています。

北迫氏の展覧会は毎年開催していますが、今回は学生時代の写真やプロフィール、そして春から夏にかけての花や植物が描かれた２０作品を展示しました。

４月１０日（日）には会場で座談会を開催し、「山下清」、「北迫正治」を知る川畑弘見氏、北迫睦男氏（正治氏の弟）から貴重なお話を聴きました。

さらに会場からも両氏にまつわる色々なエピソードも披露されて和やかな座談会となりました。

【垂水市史料集（一）】より

西南之役　私学校生徒の従軍譚（じゅうぐんたん）　①

山口栄之　筆記

（西南の役に）垂水から従軍された方々は四百五十名で、その名簿はありますけれども、その時の状況については（とら）何も記録がありません。もっとも引率者の林盛氏が捕われて東京

市ケ谷監獄にあって書かれた入獄記とかいう二巻の冊子があったそうですけれども、今はまったく所在不明であります。
吾等幼少の頃、おじさんたちから戦話を聞かされたものですが、

【お知らせ】― どなたでも参加は自由です ―

毎月第四水曜日・午後六時半から、垂水市市民館で垂水の郷土史や文化財などについて、定例の研究会を行っています。当面『垂水島津家』を中心に垂水の歴史をひもといて行きます。

場所や日時等はことごとくみな忘却して、興味ある部分だけしか覚えておりません。そこで最近―最近といっても昭和三年―改めて生存者たちに聞いてみましたが、いずれも皆片々たる話のみで、まとまったものがなく、わずかに立山健氏の話のみがやや体を成すようでありましたから、それを中軸として綴りたててみることとした次第であります。
カットは立山氏の話によって、拙いながら筆者が描いたのであります。新聞や雑誌などで、後ろ鉢巻きの薩兵姿が挿し絵にしてありますが、あれはぜんぜん間違いであります。（山口栄之）

【立山健氏への聞き書き】

出発前

明治九年十月頃（年号月日は旧暦です）今の小学校の長屋（記念校舎）で私学校が創まった。鹿児島の私学校の分教場でしょうか。五人組を作って入学せねばならぬということであったから、自分もそうして入学した。科目は剣術が主でほんの申し訳くらいに漢学があった。（明治七年四月、西郷隆盛、桐野利秋、村田新八等と謀り、鹿児島に私学校を設く。）（少警部中原尚雄等の西郷暗殺計画を知り憤激将に爆発せんとす。）―以上括弧内は国史より―
十二月の二十四、五日頃（二月の七、八日頃）になると、我々少年には判らなかったが、何となく世間が騒がしくなってきて、吾が分校生も番兵に出るようになった。風雲急なりとでもいうのでしょう。

愈々出発

かくて十二月二十八日（二月の十日頃）愈々出軍ということになった。今晩船手の下（今の桟橋付近のこと）から出帆するのだからみんなそこへ集合せよ。その合図には大砲を放つから、とのことであった。自分はその日番兵に当たっていたが、君は最早帰って用意をして浜へ行け、そして帰る途中でこのことを大声に呼ばわって人々に知らせよ、と幹部の人たちから命ぜられ、そのとおりにして帰っていった。

帰り着くともう大砲がドンと響いた。北は城山に南は上野の岡に反響して夜の空気を震撼し、凄愴の気漲って心臓の鼓動盛んに高鳴るのであった。食事を終わると早速支度をして親たちと門出の盃を致し、遅れてはならじと急いで家を出た。
この時自分は襦袢、股引の上に筒袖の袷を着、白木綿の兵児帯を締め、洋服の上着を上に着、草鞋脚絆の装束で大刀を一本腰に差し、ミニヒル銃を肩にしていた。頭には私学校帽を冠っていたのである。
家を出ると先ず御軍神（今の小学校の西端にある教室辺り）に参詣して、それから船手の下の浜へ出た。当時自分は十七歳（数え）で、他の人々も大方十七、八歳から二、三十位のところが多く、まれには四、五十歳位の老武者もあった。引率者は町田貢、林盛の両氏で総勢四百余人。これ等の人数を運ぶ船は何十艘であったか、丸木舟やその他の船が艫（船の後部。船尾）を並べて繋がれていた。そして船頭は各五、六人ずつ乗り組んでいたようである。
自分がここに来た時は最早たくさん集合していて、見送り人や付添人などで黒山の群衆であった。誰であったか、自分を見て「立山どんの稚児や、ドレ」と言いざま、脇をヒョッと抱えて船に乗せてくれた。それほどに自分はまだ子供らしかったであろう。

旅費

旅費は自弁ではないはずだけれども、入隊までの間の旅費とその後の小使銭の用意に多少の金額を必要とした。
伊集院興輔氏の談であるが、彼の兄藤五郎が従軍するので、住宅の表の床の間八畳敷を切り離して売却し、代金二十五円を得てそれを持って行かれたと。
また町田幾穂氏の談であるが、彼の実父・実広氏が旅費を借ろうと思い、かねて有福の聞こえある百姓数人を呼んで相談されたところ、戦争に行く人に貸すのは返金の見込みが覚束ないから誰も応ずる色が見えない。再三口説いてみたけれども更に効がないので、「ヨシ、しからば借らぬ。」と励声一番、憤然として座の右に置いていた刀を取り上げて立とうとされた。それを見た百姓の一人、斬られるのかと思って後ずさりをしたとたん、框を越えて土間に仰向けに顚倒（ひっくり返った）したという。

―（以下次号）―

―たるみず春秋―

青紫蘇の美味さや齢重ねたり　　馬渡美紀

（青紫蘇・・夏）

梅雨に入ったころ、紫蘇が大きな顔をして庭に威張り出す。そして冷そうめんに刺身に、食事のたびに料理に登場して、鮮やかな芳香を放ち始めるのだ。

若いころはそんなにうまいとは思わなかった紫蘇も最近、じつに美味いなあ、と感じるようになった。ことに夕餉に添える冷奴に青紫蘇を刻むとなんつぁならん、のである。

左手に缶ビール、至福の時だ。

（文章：瀬角龍平）